

令和3年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書

# 障害のある人の 社会参加について考える

～芸術文化における共創の実践から～

# はじめに

昨今、障害福祉サービスは、制度が整ってきたことにより充実しつつあり、様々な障害についての認知度も向上してきました。しかし、福祉制度のはざまに置かれている人や、その特性への理解が進んでいないことから福祉サービスが届きにくく、安心して充実した地域生活を送ることが難しい状況にある人も少なくありません。その人たちを取り巻くニーズとは何か、どのような支援が必要とされているのか。社会福祉法人グロー(GLOW)が行う、地域ケアサービス推進事業(滋賀県補助事業)は障害特性による生きづらさやニーズに応じた支援のあり方を探り、モデル的な実践を行ってきました。

今年度は、芸術鑑賞や音楽をテーマとしたワークショップをきっかけに、「盲ろう」「知的障害」の方々のアクセシビリティ(社会参加のしやすさ)という視点で支援のあり方について研究しました。昨年度に引き続き、障害当事者、支援者、芸術文化関係者と協力して企画を考え、地域住民の方々と一緒に活動を行いました。今回は、芸術文化における共創の場を通じて障害のある人が社会参加しやすくなるための実践をするとともに、これまで芸術鑑賞会等で取り組んできた工夫や合理的配慮を他の場面に広める試みを行いました。障害のある人が地域において主体的に参加できる活動の幅が広がるように、アクセシビリティの向上を図る試みです。

また、同事業では、現代において糸賀一雄氏の思想に通底する実践を行っている方々の考えや活動を「SHIGA-FUKU」というウェブサイトで発信しています。障害福祉領域だけでなく、共生社会の実現につながる様々な取り組みについて、幅広く活躍されている実践者を取材しました。今回実施したアクセシビリティの研究に関連するインタビューを併せて掲載しています。

誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある人とともに考えることで、それぞれの場や地域において相互理解が深まり、社会参加のしやすさにつながることを期待しています。

2022年3月

社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～  
法人事務局芸術文化部 地域共創課

## 令和3年度地域ケアサービス推進事業報告書 目次

はじめに

### 第1章 地域ケアサービス推進事業について

(1)事業目的	4
(2)実施内容	4
(3)本書における「アクセシビリティ」について	4
(4)研究課題	5

### 第2章 知的障害のある人と鑑賞方法を考える

(1)みんなの“鑑賞”1— 障害者支援事業所いきいき+野原健司と考える	6
(2)5つの鑑賞方法	7
(3)検討会議の流れ	8
(4)プロジェクトメンバーの声	10
(5)アンケート結果	10
(6)考察	12

### 第3章 盲ろうの人と鑑賞方法を考える

(1)みんなの“鑑賞”2— しが盲ろう者友の会の人たちと考える	14
(2)「さわる」と「対話」の鑑賞方法	15
(3)検討会議の流れ	16
(4)プロジェクトメンバーの声	18
(5)アンケート結果	18
(6)考察	20

### 第4章 盲ろうの人と音楽を楽しむ

(1)盲ろうの人と楽しむ音楽ワークショップ	22
(2)ワークショップ実施までの流れ	22
(3)ワークショップレポート	24
(4)アンケート結果	26
(5)考察	28

インタビュー 東恵子さん(八幡ハチドリ会 会長) 30

インタビュー 太田清蔵さん(NPO結の家 代表) 34

インタビュー 坂元孝行さん(ワークショップ水口 所長) 38

まとめ 42

# 第1章

## 地域ケアサービス推進事業について

### (1) 事業目的

誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、障害のある人たちのアクセシビリティ（社会参加のしやすさ）という視点で支援のあり方について研究し、合理的配慮の進展につなげることを目的としています。

### (2) 実施内容

今年度は、知的障害のある人や盲ろうの人と美術鑑賞の方法を考えるという取り組みを行いました。障害当事者、支援者、アーティストらと検討会議を重ね、それぞれに合った作品の楽しみ方を考え、形にし、鑑賞方法を考えたメンバーによる解説付きの作品鑑賞会を実施しました。また、盲ろうの人と音楽を楽しむワークショップを試行しま

した。盲ろう者、支援者、講師と事前打ち合わせを行い、地域住民も一緒に参加できるワークショップを組み立てました。

昨年度に実施した芸術鑑賞会や食のワークショップで取り組んだ工夫や合理的配慮を様々な場面に応用し、障害当事者や支援者とともに企画を作るプロセスや、地域住民とともに芸術文化を楽しむことを通じて、アクセシビリティの向上について考察しました。

### (3) 本書における「アクセシビリティ」について

アクセシビリティとは、高齢者や障害者等も含めたあらゆる人の、情報やサービスへのアクセスのしやすさという意味で使われるのが一般的です。しかし、本書においては、滋賀県の「令和3年度障害者地域生活移



昨年度の取り組み（盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ「ランチと芸術鑑賞会」）

行促進事業」の要綱にならない、障害のある人の社会参加のしやすさという意味で使っています。

アクセシビリティの向上における要因やアプローチについて考察しました。

### (4) 研究課題

本事業の最終的な目標は、障害のある人が安心して充実した地域生活を送れることです。そのためには、障害のある人がライフスタイルや参加する活動を選択できることが重要だと考えられます。本研究では、その実現を「アクセシビリティの拡充」と捉え、芸術文化をきっかけとする実践を行いました。

具体的には、「障害のある人が地域の中で主体的に参加できる機会が増えること」「障害のある人の活動の幅を広げる支援者や住民が増えること」がアクセシビリティの拡充につながると推察し、実践を通して検証し、

※昨年度の実施内容は、SHIGA-FUKU (<https://careservice-shiga.com/>)掲載の報告書アーカイブ令和2年度から確認できます。



## 第2章

# 知的障害のある人と鑑賞方法を考える

### (1) みんなの“鑑賞”1

#### — 障害者支援事業所いきいき + 野原健司と考える。

障害者支援事業所いきいきの利用者や支援者の方々、アーティストの野原健司さんと一緒に「作品をどうやって鑑賞するのがよいか？」ということについて考えました。鑑賞したのは、野原さんによる美術作品です。いきいきの利用者3人が中心となって考えたそれぞれの「こう見たい！」を形にしました。

この企画で目指したことは、一人一人が自分に合った方法で作品を鑑賞できる、それぞれのアートの楽しみ方を実現することです。検討会議を重ねて、その成果を展示し、鑑賞方法を考えたプロジェクトメンバーによる解説付きの作品鑑賞会を実施しました。メンバー同士で話し合いながら、ともに企画を進めていきました。

#### プロジェクトメンバー

河原崎未識(障害者支援事業所いきいき)  
外山聖(障害者支援事業所いきいき副所長)  
野原健司(アーティスト)  
森美菜子(障害者支援事業所いきいき)  
安田真一郎(障害者支援事業所いきいき)

#### 「みんなの“鑑賞”」とは

「みんなの“鑑賞”」は、アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会が実施する「ニューノーマル時代にアートで人をむすぶプロジェクト」の一環として行われた取り組みです。コロナ以降、ニューノーマル時代のコミュニケーションが、誰にとっても開かれたものであるように、「障害」「地域」といったテーマに対して、アートを通してできることは何か、考え、形にすることを目的としたプロジェクトです。

「みんなの“鑑賞”」は、誰もがアートを楽しめるように、美術鑑賞の方法を、知的障害のある人や盲ろうの人が、アーティストらと一緒に考える企画です。この企画で生まれた鑑賞方法を、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA企画展「79億の他人」で展示しました。

展示期間:2021年9月18日(土)~11月21日(日)  
展示場所:まちや倶楽部(滋賀県近江八幡市仲屋町中21)



プロジェクトメンバー

### (2) 5つの鑑賞方法

#### みんなで考えた 「絵の高さを変えられる壁」

絵の裏にあるハンドルを回すと、絵の高さを自分の好みに合わせて変えられます。



#### 安田真一郎さんが考えた 「ベストポジション」

安田さんの理想は、1人で静かに作品全体を見まわすというもの。椅子に座ると、そんな安田さんの目線で展覧会を楽しめます。



#### 外山聖さんが考えた 「あなたのベストポジション」

受付に、貸し出し用の椅子が置いてあります。お気



に入りの作品を前に腰かけられます。

#### 森美菜子さんが考えた 「感想シェアボード」

作品を見た感想等をふせんに書き、ボードに貼ります。ふせんには、表情が描かれたシールを貼ることもできます。



#### 河原崎未識さんが考えた 「おしゃべりステッカー」

作品や展覧会について誰かとお話したい人、お話ししてもいい人は、「おしゃべりしながら楽しみたい」ステッカーを付けます。だまって作品を見たい人、話しかけられるのはちょっと苦手という人は、「おしゃべりしないで楽しみたい」ステッカーを付けます。



### (3) 検討会議の流れ

野原さんの作品を見て、自分だったらどうやって作品を鑑賞してみたいか話し合いながらアイデアを出しました。

お話しするのが好きな河原崎さんは、「作品を見た感想を誰かに伝えたい!」という思いから、「お話ししたい人はステッカーを付けて、ステッカーを付けている人同士でおしゃべりできるようにする」という方法を考えました。森さんからは、「自分の感想もシェアしたいし、他の人の感想も知りたい」ということで、「作品の感想をふせんに書いて、ポー

ドに貼ってシェアする」という仕組みの提案がありました。「静かに作品を見たい」「遠くから作品全体を眺めたい」という安田さんの理想は、会場に安田さんの「ベストポジション」を作ること具現化しようと考えました。また、プロジェクトメンバー全員から「作品の高さを、見る人の目線に合わせて動かせるといい」という声も上がりました。

これらのアイデアを、試作品等を使ってメンバーに検証してもらい、それぞれが考えた鑑賞方法を形にしていきました。

#### 第1回検討会議 7月9日(金) .....

プロジェクトメンバーの初顔合わせを行いました。メンバー全員がNO-MAに揃い、自己紹介をした後、NO-MAに展示されていた美術作品を鑑賞しました。作品鑑賞の後、場所を移して、この日の鑑賞についての感想や、今後、どのように作品を鑑賞してみたいかを話し合いました。



#### 第2回検討会議 8月19日(木) .....

プロジェクトメンバーのホームグラウンドである障害者支援事業所いきいきに一室をお借りし、野原さんの作品をいくつか並べ、鑑賞しました。それぞれゆっくり作品を見た後、気になった作品について、それぞれどうやってその作品を楽しみたいか意見を出し、その意見をもとに鑑賞方法のアイデアをまとめました。



#### 第3回検討会議 9月3日(金) .....

プロジェクトメンバーが選んだ野原さんの作品を、展示会場となる「まちや倶楽部」で実際に鑑賞しました。前回の検討会議で出た鑑賞方法のアイデアを具体化した試作品等を使って体験し、意見を出し合いました。メンバーの意見をもとに什器や道具の試作品を改良していきます。



#### 第4回検討会議 9月16日(木) .....

最後の検討会議では、プロジェクトメンバーに展示の設営に立ち合ってくださいました。野原さんの作品を展示すると同時に、それぞれが考えた作品の楽しみ方を確認していきます。考えたことが目の前で実現していくその喜びを、メンバー、スタッフで味わいました。



#### 「障害者支援事業所いきいき+野原健司と楽しむ鑑賞会」

日時:10月1日(金) 13:30~14:45

会場:まちや倶楽部 参加者:4人

プロジェクトメンバーが、それぞれ考えた鑑賞方法について解説する作品鑑賞会を開催しました。参加者は、メンバーと一緒に様々な鑑賞方法を試しながら作品を楽しみました。



## (4) プロジェクトメンバーの声

「最初は私にできるの?と不安がありました  
が、参加させてもらうにつれて、私にもこんなことできるんだなと実感することができました。そして私の提案が形になったことが私はすごくうれしかったです。」(森さん)

「障害のある人の支援に携わっているので、ある程度イメージはしていましたが、それをを超えるくらいおもしろいことをみなさんが提案されたので、新鮮で、自分の考えもやわらかくなったなと思います。」(外山さん)

「自分のペースで、楽しく、参加できました。」  
(河原崎さん)

「僕のNO-MAの経験から素朴に感じる人が多いですが、一人一人の個性がある中で周りの方に喜んでいただきたいと思います。」  
(安田さん)

「普段は美術館の白い壁に四角い作品を掛ける方が作り手としては楽なので、それに乗っかっていたりするのですが、でもそれ自体中世の貴族によって作られたシステムなので当然ブラッシュアップしていけばいいし、いろんな視点がすごく参考になりました。」(野原さん)

## (5) アンケート結果

### ●プロジェクトメンバー 回答者:3人(障害者支援事業所いきいき利用者)

質問1:このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか?

はい 100%

質問2:このプロジェクトに参加して良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろんな人たちと出会えた	3
自分が提案したことが形になった	3
新しい体験ができた	2
話し合いの場に参加できた	2
作品を見て、楽しむことができた	2
自分の考えを発表できた	1
その他	0

### ●鑑賞会参加者 回答者:4人

質問1:鑑賞会は、いきいきの皆さんや野原さんと一緒に楽しめましたか?

はい 100%

質問2:鑑賞会で良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろんな鑑賞方法に出会えた	4
河原崎未識さん・森美菜子さん・安田真一郎さん・外山聖さん・野原健司さんの話を聞いた	3
「みんなの“鑑賞”」について知ることができた	3
いろんな鑑賞方法を体験できた	1
〇〇さんと話げできた ↳ 野原さん	1
その他 ↳ 作品の経過等一部知ることができた/説明を受けて良くわかった	2

質問3:鑑賞会で良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
充実した作品鑑賞ができた	3
こういう見方があるのかと思った	3
もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい	3
自分だったらどう見てみたいか考えさせられた	1
自分も同じようなことを思っていた	0
今後、生かせそう	0
その他	3

質問4:アートを通じて、障害のある人やマイノリティの立場にある人とともに生きやすい社会を作ろうとする考え方がありますか。この考え方に可能性を感じますか?

はい 75% 無回答 25%

## (6) 考察

「みんなの“鑑賞”1」では、知的障害のある人が自分に合った作品の鑑賞方法を考え、それを形にするということを行いました。プロジェクトメンバーである障害者支援事業所いきいきの利用者3人全員が「自分に合った作品の楽しみ方を考えられた」「自分が提案したことが形になってよかった」と回答していることから、一人一人が鑑賞方法を主体的に考え、それを実現することができたと考えられます。

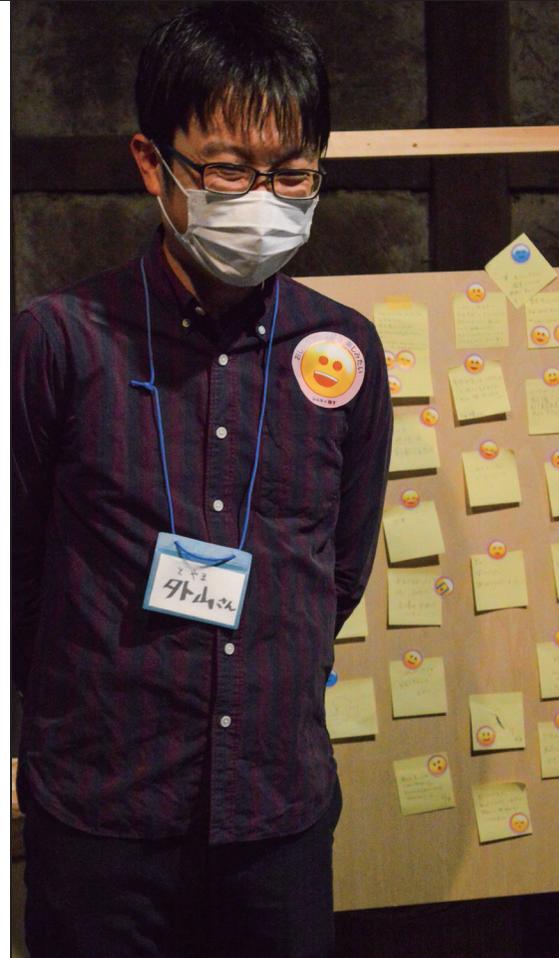
今回は、いきいきの利用者、支援者、アーティストがプロジェクトメンバーとして参加し、4回の検討会議を通して、作品の楽しみ方について話し合いました。知的障害のある人が美術館賞を自らの方法で楽しむことができる機会となったことに加え、「いろんな人たちと出会えた」「話し合いの場に参加できた」という回答も多かったことから、普段出会う機会が少ない人々と交流し、意見を共有できる場としても、参加できる活動の幅を広げる取り組みとなったといえます。知的障害のある人と企画をともに考えて作る共創のプロセスは、それ自体がアクセシビリティの拡充につながる体験でもあり、また自ら考え、形にするという、主体的な参加方法でもありました。美術作品を鑑賞するという体験において、鑑賞方法を考えるプロジェクトメンバーという主体的な立場で参加する選択肢が生まれ、参加できる活動の多様化を図ることができたと考えます。

また、知的障害のある人が主体的に活動に参加できるようにするためには、周囲の介入を抑えるのではなく、それぞれの知見や経験

を生かし、対等な立場で意見を出し合うことが重要だということが示されました。鑑賞方法をとともに考えるプロセスは、支援者やアーティストにとっても、新たな考えや視点に出会う体験となり、すべてのメンバーにとって創造的な試みであったことは、それぞれの主体性が尊重されるという点で、アクセシビリティの拡充につながる重要な要因であったと推察します。

鑑賞会については、参加者全員から「いろんな鑑賞方法に出会えた」との回答があり、「こういう見方があるのかと思った」「もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい」という回答も多かったことから、考え方の多様性を伝えるものになったといえます。また、母数は少ないとはいえ、アートをきっかけとする共生社会に向けた取り組みに可能性を感じると答えた参加者が75%を占めたことは、知的障害のある人と出会い、ともにアートを楽しむことで、共生社会づくりに期待感を持つ、もしくは持ち続けてもらうことができたことを表しているといえます。そのような視点を持つ地域住民が増えることは、障害のある人の活動の幅を広げることにつながると期待できます。

最後に、今回の企画は「作品の見方に決まりはなく、それぞれの楽しみ方があったといい」という美術鑑賞のあり方を示すものとなりました。誰でも自分に合ったアートの楽しみ方を選べるということは、障害のある人がライフスタイルや参加する活動を選べるということにも通底します。今後も、障害のある人と企画を共創し、地域の人とともに活動を楽しみながら、アクセシビリティの拡充に取り組んでいきたいと思えます。



## 第3章

# 盲ろうの人と鑑賞方法を考える

### (1) みんなの“鑑賞”2 —しが盲ろう者友の会 の人たちと考える。

2019年度から盲ろうの人(※1)との芸術鑑賞の取り組みを行ってきました。2019年度は立体作品をさわって鑑賞し、2020年度は、写真作品の芸術性を伝達することを試みました。課題として残ったことは、作品情報を伝えようとするとき、盲ろう者にとって体験したことがないことや抽象的なものを想像するのは難しいということでした。これを受けて、今年度は、「さわる」と「対話」をテーマに鑑賞方法を考えました。

「みんなの“鑑賞”2」(※2)では、盲ろう者、支援者、空間デザイナーにプロジェクトメンバーとして参加いただき、視覚と聴覚以外の方法で作品を鑑賞し、そこで生まれた対話の内容を形にして、展示しました。また、盲ろ

うのメンバーと一緒に作品を鑑賞する鑑賞会も開催しました。



プロジェクトメンバーや通訳介助者の方々

#### プロジェクトメンバー

岡田昌也(NPO 法人しが盲ろう者友の会理事長)  
岡本克司(NPO 法人しが盲ろう者友の会副理事長)  
北川雅貴(NPO 法人しが盲ろう者友の会理事)  
野中美智子(NPO 法人しが盲ろう者友の会事務局)  
安川雄基(合同会社アトリエカフエ代表)

※1 「盲ろう」は、その見え方や聞こえ方の程度によって、大きく分けると、(1)全盲ろう、(2)弱視ろう、(3)全盲難聴、(4)弱視難聴の4つに区分されます。加えて、先天性か、後天性かということもあり、その障害像を一口にくることはできません。他方、情報の取得にあたり、「触覚」が多くを占めていることは、盲ろう者に共通していることです。

※2 「みんなの“鑑賞”」についてはP6を参照

### (2)「さわる」と「対話」の 鑑賞方法

盲ろう者と、見えて聞こえる人がともに作品をさわり、対話を深める形で、作品の鑑賞を行いました。「さわる」ことで、作品の形や質感等を体感します。「対話」は、さわって得られた感想を他の誰かと共有し深める意味があります。

参加した盲ろう者は、プロジェクトメンバーの岡田さん(全盲ろう)、北川さん(全盲ろう)、岡本さん(弱視難聴)です。カッコ内はそれぞれの障害状態像で、コミュニケーション手段は、岡田さん、北川さんは触手話、岡本さんは、サウンドプロセッサ(人工内耳の受信装置)に接続したマイクに話す音声コミュニケーションです。対話相手になったのは、アーティストの八幡亜樹さん(見えて聞こえる)、空間デザイナーの安川雄基さん(見えて聞こえる)、筆者である社会福祉法人グロー職員の石田瞳(近視、聞こえる)です。

机の上に作品を置き、机の一方には盲ろう者と通訳介助者、もう一方には見えて聞こえる対話者とファシリテーターが座り、双方が作品にさわって感想を交換するという鑑賞方法を試みました。対象とした作品は、佐々木卓也さんの作品で、独特のポーズを取る陶製の女性像です。その結果、興味深い3通りの対話が生まれました。それぞれの対話の一部を紹介します。



佐々木卓也《あやちゃん》  
2005

岡田さんと八幡さん  
八幡:「世界」をどのように感じ取っていますか?  
岡田:映画とか漫画とか昔の記憶と結びつく。女の子は髪の毛が長かったという記憶があった。

八幡:芸術というものは好きですか?

岡田:昔はものづくりとか写真が好きだった。見えなくなつてからはやはりあまり興味がないですね。家の中のお仏壇とか、手触りで、過去の記憶が残っている。形も好きですが、いろんな色があるのも好きです。いろんな色が付いていると、気持ちも明るく元気になるように思います。

八幡:今日の岡田さんのシャツ、カラフルで胸に落ちました。

北川さんと安川さん  
北川:(真ん中の腕の部分さわって)赤ちゃんを抱いているのかな?

安川:僕には0歳の子供がいます。たしかに床に座って抱っこしていると似た体勢になります。僕には考えごとか、悲しそうな顔をしている女性のように見えます。

北川:赤ちゃんに、早く寝てほしいと思ってるのかな。

安川:この女性がどんなことを思っているか想像しますか?

北川:旦那さんがかまってくれないのかな?育児疲れかな?

安川:僕は最初、赤ちゃんを抱っこしているようには見えませんでした。育児が大変な女性に見えてきました。

岡本さんと石田  
岡本:人かと思ったけど、意外なところに突起があったので違うかな。

石田:不思議なポーズをしているので、人間とはわかりにくい形になっています。

岡本:あぐらをかいているのはイメージできたので、男性かなと思いました。女性と聞くと、あまりべたべたとさわってはいけない気持ちに。

石田:肌の色は濃いブラウン。不思議なのは、手足がカラフル。おとなしくはなさそう。

岡本:女性がスカートにあぐら?(視覚的に)おとなしくなさそう?

自分のタイプではないかも。視覚的な作品イメージを聞くと感触が変わった。最初よりも柔らかいように思います。

### (3) 検討会議の流れ

盲ろうのメンバーと見えて聞こえる人が対話しながら作品を鑑賞し、その対話を記録した展示台を試作し、盲ろうのメンバーに意見を聞きながら改良を加えました。台のボードを読むことで3通りの対話の流れを俯瞰

できるようにしました。また、文字を点訳シートにして墨字の上に貼ったほか、対話内容に関連したさわれるモノを配置する等、視覚的にも触覚的にも楽しめるようにし、検討会議の成果としての展示台を完成させました。

#### 第1回検討会議 7月1日(木) .....

顔合わせともなる1回目の検討会議には、盲ろうのプロジェクトメンバーとして岡田さんと北川さんに参加いただきました。試した鑑賞方法は、「見えない、聞こえない」人と「見える、聞こえる」人同士がペアになり、互いに作品をさわった感想やイメージを、触手話による通訳を介して、話し合うというものです。振り返りの中では、「楽しかった」という感想が上がり、「さわる」「対話する」という方針が固まりました。



#### 第2回検討会議 8月6日(金) .....

盲ろうのプロジェクトメンバーである岡田さん、岡本さん、北川さんの3人全員が出席されました。前は、ペアになって作品を鑑賞しましたが、今回は、ファシリテーターに加えてもう1人対話相手に参加いただき、3人で作品をさわって、話し合いながら作品を楽しみました。成果展示のため、盲ろうのメンバーと見えて聞こえる対話者が作品を鑑賞している様子の動画も撮影しました。



#### 第3回検討会議 8月25日(水) .....

3回目の検討会議の目的は、作品を挟んで対話した記録を、鑑賞した作品とともに展覧

会で紹介するためのプランの検討です。盲ろうのプロジェクトメンバーとしては、岡田さんのみの参加となりました。マインドマップのように対話者が話した言葉を散りばめたボードがついている展示台のプランを共有しました。この会議で岡田さんからいただいた意見から、ボードに点字も付けることや、情報だけではなくてさわって楽しめるようなモノを配置すること等、方針を修正しました。



#### 第4回検討会議 9月17日(金) .....

最後の検討会議には、岡田さんと岡本さんが出席されました。完成した展示台を確認していただきました。岡田さんは点字を読みながら、岡本さんは、通訳介助者やスタッフが言葉を読み上げるのを聞きながら、台をさわって鑑賞しました。作品をさわりながら発言した内容を思い出したり、他の参加者が同じ作品をさわってどのように感じたのかを確認めたりする鑑賞となりました。



#### 「しが盲ろう者友の会の人たちと楽しむ鑑賞会」

日時:10月8日(金) 13:30~15:00

会場:まちや倶楽部、酒遊館 参加者:4人

検討会議の成果として生まれた展示台を活用した鑑賞会を開催しました。

成果展示を鑑賞した後、盲ろうのプロジェクトメンバーとともに粘土やガラスの作品をさわって、対話しながら鑑賞しました。参加者は、メンバーとの作品鑑賞やコミュニケーションを楽しみました。

鑑賞会終了後、メンバーで振り返りを行いました。今回の取り組みの良かった点や改善できる点、プロジェクトに参加した感想等を共有しました。



## (4) プロジェクトメンバーの声

「盲ろう者だけでは楽しくないかも。いろんな人と出会えて良かった。今まではその時だけの参加だったが、話し合いから参加できて良かった。盲ろう者も同じ人間として情報を交換したい。」(岡田さん)

「今回の展示は、盲ろう者の頭の中をのぞいているよう。(盲ろう者が)話していたことを支援者やその相手の方だけではなく、それ以外の人にもわかってもらうことができるんだということがわかった。」(野中さん)

「ガラスの作品(※)には、イメージがわきにくいところがあった。作品から、自分の考えが表現されて良かった。」(岡本さん)

「粘土のイメージが難しかった。欠席が多くなってしまったので残念だった。」(北川さん)

「対話に参加させてもらって、自分たちがいかに視覚でしか情報を取っていないかということにハッとさせられた。目の見える方にも、色々さわりながら情報をキャッチしてもらえらる仕組みになるといいなと思った。」(安川さん)

※「しが盲ろう者友の会の人たちと楽しむ鑑賞会」で鑑賞した作品

## (5) アンケート結果

### ●プロジェクトメンバー 回答者:3人(盲ろう者)

質問1:このプロジェクトに参加して、自分に合った作品の楽しみ方を考えられたと思いますか?

はい 100%

質問2:このプロジェクトに参加して良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
新しい体験ができた	3
いろんな人たちと出会えた	3
作品をさわって、話しながら楽しむことができた	3
他の人の考えを知ることができた	3
話し合いの場に参加できた	3
自分の考えを話すことができた	2
自分が提案したことが形になった	2
その他	0

### ●鑑賞会参加者 回答者:3人

質問1:鑑賞会は、しが盲ろう者友の会のメンバーと一緒に楽しめましたか?

はい 100%

質問2:鑑賞会で良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
いろんな感じ方に出会えた	3
作品をさわって、対話しながら鑑賞できた	2
「みんなの“鑑賞”」について知ることができた	2
岡田昌也さん・岡本克司さん・北川雅貴さんが作品をどう感じ取ったか知ることができた	1
〇〇さんと話げできた └ 岡本さん、宮沢さん	1
その他 └ 初めて参加させてもらい、自分の考えや思いが広がった気がします	2

質問3:鑑賞会で良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数
もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい	3
今後生かせそうな気づきがあった	3
充実した作品鑑賞ができた	2
こういう捉え方があるのかと思った	2
お互いの感じ方を共有できた	2
自分だったら作品をどう捉えるか考えさせられた	0
その他 └ 単純に楽しかったです	1

質問4:アートを通じて、障害のある人やマイノリティの立場にある人とともに生きやすい社会を作ろうとする考え方があります。この考え方に可能性を感じますか?

はい 66.7% 無回答 33.3%

理由: ・作品鑑賞は積極的な誤読だと思います。正解はありません。違う感じ方、考え方を伝え合うことは、違う立場の人が一緒に立つ場所を作り、居られる領域を拓けることになると思います。  
・人とのコミュニケーションに想像力は不可欠ですが、今は一方的に発信する、受け取るという形に変化していると思います。障害あるなし、マイノリティは関係なく、相手のことを想像するという考え方がもっと広がるといいし、アートはそのきっかけとしてわかりやすく、とっつきやすいと思います。

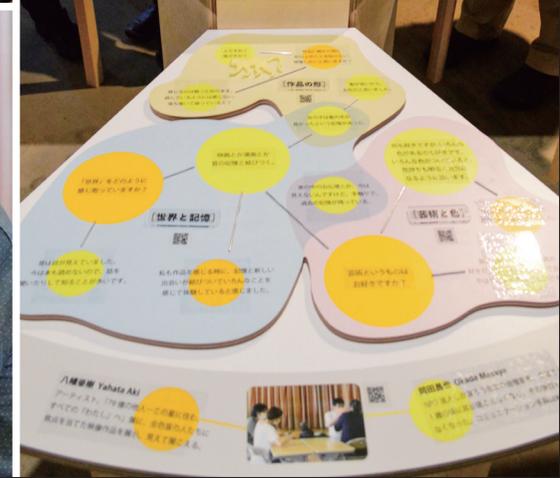
## (6) 考察

今年度は、盲ろう者との対話を中心にプロジェクトを進めました。盲ろうのプロジェクトメンバー全員から、「作品をさわって、話しながら楽しむことができた」「話し合いの場に参加できた」等の回答がありました。また、岡田さんの「今まではその時だけの参加だったが、話し合いから参加できて良かった。盲ろう者も同じ人間として情報を交換したい」という言葉から、ヒアリングやイベントの対象ではなくプロジェクトメンバーという立場で参加できる選択肢があることや、質問に答え、情報を受け取ることに限られない双方向の対話の重要性が示されました。作品鑑賞という点においても企画を考えるプロセスにおいても、対話や話し合いの場を持つことが重要であり、そのような機会を作っていくことは、盲ろう者が主体的に参加できる活動の幅を広げることにつながると考えます。

また、このプロジェクトは、成果展示を通して盲ろう者の考えや感じ方を伝える取り組みとなりました。昨年度までは、作品について盲ろう者にわかりやすく伝えることを検証してきましたが、今年度は、盲ろう者と見えて聞こえる人が対話して作品を鑑賞し、その記録を形にしました。「自分の考えが表現されて良かった」という岡本さんの感想や「盲ろう者の頭の中をのぞいているよう」という野中さんの感想から、今回の企画は、「盲ろう者に伝える」ではなく「盲ろう者が伝える」鑑賞方法を考えるものであったといえます。対話を記録した展示台はさわって楽しめるように工夫し、盲ろう者も自身や他のメン

バーの対話録を読むことができるようにしました。その結果、検討会議では盲ろうのメンバーから「OOさんはこう感じたのか、全然違うのが面白い」というような感想を聞くことができました。情報をわかりやすく伝えることも大切ですが、盲ろう者と対話し、情報を交換し、その人たちの考えをともに伝えていくということも、盲ろう者が主体的に参加できる機会が増えるためには欠かせないことなのではないでしょうか。

鑑賞会の参加者においては、アンケートに回答したすべての人が「いろんな感じ方に出会えた」「もっとこういう鑑賞ができるようになってほしい」「今後生かせそうな気づきがあった」と回答しています。今回の成果展示や盲ろうのメンバーとの対話を通して、盲ろう者の考えが参加者に伝わり、盲ろう者と対話することへの可能性を感じてもらえたといえます。さらに、アートをきっかけとする共生社会に向けた取り組みに可能性を感じると答えた人は、その理由について「違う感じ方、考え方を伝え合うことは、違う立場の人が一緒に立つ場所を作る」「障害あるなしは関係なく、相手のことを想像するという考え方がもっと広がるといい」と答えています。そのような視点を持つ人が地域に増えることで、盲ろう者、ないしは社会参加が難しい状況にあるすべての人のアクセシビリティの拡充につながると期待します。



## 第4章

# 盲ろうのひとと音楽を 楽しむ

### (1) 盲ろうのひとと楽しむ音楽 ワークショップ

昨年度は、盲ろうのひと、視覚障害のひとと楽しむ「食」をテーマとしたワークショップを開催しました。今年度は、盲ろう者が主体的に参加できる活動の選択肢が地域に増え、地域住民が盲ろう者への理解を深められる機会を創出することを目的に「音楽」をテーマとしたワークショップを企画しました。昨年度に引き続き、しが盲ろう者友の会の協力のもと、今年度は、おとさぼ(滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター)にも協力いただき、「盲ろうのひとと楽しむ音楽ワークショップ」を実施しました。盲ろう者、支援者、講師と事前打ち合わせを行い、ワークショップのプログラムを組み立て、盲ろう者や地域住民の人たちに参加いただき、音楽をともに楽しみました。



#### 実施概要

日 時: 12月17日(金) 13:00~15:00  
 会 場: 安土コミュニティセンター 大ホール  
 対象者: 盲ろうのひと、一緒に楽しみたいひと、このワークショップに興味のあるひと  
 参加者: 25人(うち盲ろう者6人、その他の参加者4人、通訳介助者12人、手話通訳者・事務局3人)  
 講 師: 山本知香氏(滋賀大学音楽教育支援センターおとさぼ特任講師・日本音楽療法学会認定音楽療法士)ロビン・ロイド氏(民族音楽家)  
 協 力: おとさぼ(滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター)、NPO法人しが盲ろう者友の会

### (2) ワorkshop実施までの流れ

しが盲ろう者友の会、おとさぼに協力いた

**盲ろうのひとと楽しむ  
音楽ワークショップ**

目と耳の両方に障害のある盲ろうのひとと一緒に楽しむ音楽ワークショップを開催します。目で見て、耳で聴くだけでなく、体で感じながら、ともに音楽を楽しんでみませんか？

**日 時: 12月17日(金) 13:00~15:00**

**会 場: 安土コミュニティセンター大ホール**  
(滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4660)

**対象者: 盲ろうのひと、一緒に楽しみたいひと、このワークショップに興味のあるひと** ※全体的手話通訳者の配置はありませんのでご了承ください

**参加費: 無料**

**定 員: 15名(要予約)**

**講 師:**  
**山本知香氏** (滋賀大学音楽教育支援センターおとさぼ特任講師・日本音楽療法学会認定音楽療法士)  
 障害のある子どもから大人の方まで、いろんな人たちと音楽を通して関わりを持ち、周りのひとと、無理なく楽しくともに生きていくことについて、日々あれこれ考えている。  
**ロビン・ロイド氏** (民族音楽家)  
 アメリカ、イリノイ州出身。大学卒業後、アジアを拠点に50カ国以上を旅し、多くのミュージシャンとともに音楽を楽しむ。現在は、ミュージシャン、音楽講師、音楽療法士、詩人、旅人など、幅広く活動している。

主催: 社会福祉法人グロー (GLOW)  
 協力: おとさぼ (滋賀大学教育学部附属音楽教育支援センター)、NPO法人しが盲ろう者友の会  
 令和3年度障害者就業・生活支援センター事業

だき、事前打ち合わせを行い、盲ろう者、支援者、講師とともにワークショップの内容を企画しました。また、地域の商店や団体への広報を行い、地域住民の人たちも一緒にワークショップに参加していただけるよう周知を図りました。

#### 事前打ち合わせ

盲ろう者、支援者、講師らに出席いただき、顔合わせの場を設け、盲ろう者と一緒に音楽を楽しむ方法について検討しました。盲ろう者がどのようにコミュニケーションを取り、音楽を楽しんでいるかについて情報が共有され、実際、どの楽器が体に響くか盲ろうの出席者にその場で演奏して試していただきました。ここでの話し合いをもとに、講師にワークショップのプログラムを考えていただき、後日、講師、支援者と意見交換する場を設けました。支援者からは、「盲ろう者

に抽象的な表現は伝えにくいいため、『パーソナルテンポ』ではなく鼓動に合わせてテンポをとる方が伝えやすいのではないかと「音がフィードバックしないので、ストロー笛は吹きにくいかも」等の意見が上がり、それらを踏まえてプログラムを改良していきました。

#### 地域への広報

地域の商店や団体にチラシを配布し、地域住民に向けてワークショップの周知を図りました。チラシ設置に協力いただいた商店や団体を通して、地域住民の人たちにも情報が届き、盲ろうという障害や、美術をきっかけとしたアクセシビリティ拡充の取り組みについて理解や関心が広まることをねらいとしました。

### (3) ワークショップレポート

講師の山本さん、ロビンさんのファシリテーションのもと、盲ろう者と一緒に様々な楽器を演奏し、音を体で体感しながら音楽を楽しみました。

最初に、しが盲ろう者友の会事務局から会場や参加者数についての状況説明がありました。見えない、聞こえない人たちに、どのような場所にどのような人たちとともにいるのか、状況を予め伝えることはとても重要なことです。

#### ①自己紹介・楽器紹介

講師の自己紹介があり、体をほぐす簡単な体操をした後、楽器を紹介していただきました。楽器は、数も種類も多く、一つ一つ、山本さんが特徴を説明し、ロビンさんが音を鳴らして響きを確認しました。

#### ②楽器にさわる

参加者それぞれが楽器にさわり、音を出してみました。どうしたら音がよく響くか、盲ろう者、通訳介助者、講師と一緒に工夫しながら楽しんでいる様子でした。

#### ③質問タイム

楽器にさわった後、講師への質問タイムを設けました。参加者からは、「楽器はどこの国のものか?」「ロビンさんは楽器を作っているか?」等の質問が出ました。



#### ④ロビンさんの演奏

ロビンさんがカホンを演奏してくださいました。盲ろうの参加者自身がカホンを叩いたときには、音の響きはあまり伝わらず皆さん一様に首をかしげていましたが、ロビンさんの演奏が始まった瞬間、全員にその響きが伝わり、同じ瞬間に同じ響きを共有できた感動が会場内に広がりました。

#### ⑤即興演奏

参加者それぞれが好きな楽器を選び、全員で即興演奏しました。講師の合図に合わせて演奏が始まり、ロビンさんがベースのリズムを刻み、全員で息を合わせてクライマックスを迎え、演奏は終了しました。

#### ⑥感想シェア

参加者からは、「昔、触れたことがある楽器を久しぶりに演奏することができた」「音楽だけでなく、踊りもしたい」「響くことは、聞こえることと同じ」等の感想が共有されました。

最後に、盲ろう者でNPO法人しが盲ろう者友の会理事長の岡田昌也さんからご挨拶があり、ワークショップは終了しました。



## (4) アンケート結果

## ●盲ろう者 回答者:6人

質問1:ワークショップに参加した理由を教えてください。(複数回答有)

選択肢	回答者数	選択肢	回答者数
音楽が好き	3	参加するように勧められた	1
盲ろうの人と音楽を楽しむ方法を知りたい	3	音楽を楽しんでみたい	0
盲ろうの人と一緒に参加できる	2	参加しやすい	0
このワークショップに興味がある	1	その他	0

質問2:ワークショップで良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数	選択肢	回答者数
音楽を楽しむことができた	5	盲ろうの人と出会えた	2
盲ろうの人と音楽を楽しむ方法について知れた	3	自分の演奏を発表できた	1
新しい体験ができた	2	その他	1
楽器を演奏することができた	2	昔、タンバリン、カスタネットを使った時のことを思い出した。タイガースが演奏をしていた時を思い出した。太鼓の響きを体で感じるが音は聞こえない。	
他の人の演奏を楽しむことができた	2		
講師や他の参加者と出会えた	2		

## ●その他の参加者 回答者:2人

質問1:ワークショップに参加した理由を教えてください。(複数回答有)

選択肢	回答者数	選択肢	回答者数
このワークショップに興味がある	2	参加しやすい	0
盲ろうの人と一緒に参加できる	2	参加するように勧められた	0
音楽を楽しんでみたい	1	その他	1
音楽が好き	1	チラシを見た(安土コミセンで)	
盲ろうの人と音楽を楽しむ方法を知りたい	1		

質問2:ワークショップで良かったことはありますか?(複数回答有)

選択肢	回答者数	選択肢	回答者数
新しい体験ができた	2	講師や他の参加者と出会えた	1
盲ろうの人と出会えた	2	盲ろうの人と音楽を楽しむ方法について知れた	1
音楽を楽しむことができた	1	自分の演奏を発表できた	0
楽器を演奏することができた	1	その他	0
他の人の演奏を楽しむことができた	1		

ご意見・感想

・いつかハーブを演奏してみたい。CDが欲しい。今の家にあるCD機器が古いから買い換えようかと思っていたところ。(盲ろう者)  
 ・皆様が元気で楽しく過ごされていて良かった。盲ろうの人の一部が見えた。また機会があれば参加したい。(見えて聞こえる)

・昔より現在が変わった。コロナが終わったら盲ろう者と一緒にやりたいと思います。(盲ろう者)  
 ・娘も最初はびっくりしていましたが、しだいに笑顔になってきてたのしんでいました。盲ろうの方のコミュニケーション方法などもみれて勉強になりました。(見えない娘の母)

## ●講師・通訳介助者 回答者:9人

質問1:今回の体験は、今後、盲ろうの人、障害のある人との芸術文化活動に生かせると思いますか?

そう思う 66.7%    まあまあそう思う 33.3%

質問2:今回の体験をどのように生かせると思いますか?アイデアがあれば教えてください。(抜粋)

・「盲ろうの方と音楽」と聴いて、初めは私自身も驚きました。ですが、楽器の振動であったり、演奏する時の体の動きであったり、昔の記憶の触発であったり、いろんなところにお一人お一人の音楽の味わい方、楽しみ方があるのだと気づかせていただきました。(講師)  
 ・刺激、発見がいっぱいでした。同じような楽器を使いたいですが、事前に岡田さんと相談しながら選んでもいいかもしれません。岡田さんは良いアイデアを教えてくださいと思います。(講師)  
 ・日常的に盲ろう者さんに接していないからこそ思いつくアイデアがあると思います。盲ろう者さんの「自分もできるんだ!」という喜び、楽しみ、自信につながることを期待したいです。(通訳介助者)

・久々に盲ろう者さんの楽しそうな顔を見られた気がします。やはり、手に触れて体に響くことは、大事だと思いました。(通訳介助者)  
 ・生活訓練でも取り入れられたらいいと思いました。(通訳介助者)  
 ・盲ろう者・ろう者・聞こえる人が自由に表現でき、響きを体で感じられ、主体的に参加できる(疲れたら自由に休める)のがとても良いと感じます。(通訳介助者)  
 ・今回は楽器の種類、数が多く、楽しめた反面、じっくり取り組むためにはペースが早かったように思います。楽器の数をしぼりイメージできる曲にあわせてリズムを打つような楽しみ方ができないかな?と感じました。(通訳介助者)

## (5) 考察

今回の音楽ワークショップに参加した盲ろう者やその他の参加者、通訳介助者からは「楽しかった」という感想が多く寄せられ、音の響きを体感し、共有することで、全員で音楽を楽しむことができました。盲ろう者の半数が「音楽が好き」と答えたように、音楽にある程度馴染みがある人が今回参加し、盲ろう者自身、音楽を楽しむ方法を知りたいと考えていることもわかりました。このワークショップは、音楽を楽しむ場であったと同時に、盲ろう者が音楽を楽しむ方法について自ら知ることができる機会でもあったといえます。盲ろう者自身が様々な活動を楽しむ可能性について知ることは、参加したいと思える活動の選択肢が増えることでもあります。そのような具体的なイメージをもとに、盲ろう者が主体的に参加できる機会をともに作っていくことが重要だと考えます。

今後の課題として、今回は音楽を楽しんだ経験のある人が多く参加しましたが、音楽に馴染みがない盲ろう者も楽しめるワークショップの検討や、盲ろう者が参加しやすい学びの場を作っていくことが挙げられます。

その他の参加者については、人数は少なかったものの、盲ろう者と一緒に参加できることが参加の理由に共通していました。「新しい体験ができた」「盲ろうの人と出会えた」という回答から、今回のワークショップは、地域の人が、普段、出会う機会が少ない盲ろう者と一緒に活動し、新しい音楽の楽しみ方を味わう機会となったといえます。盲ろう者の活動の幅を広げる地域住民とは、一緒に活動を楽しみたいと思う人やその活動に面白

さを感じる人だといえるかもしれません。そのような思いを持つ出会いのきっかけとなるのが、芸術文化をともに楽しむ今回のワークショップのような取り組みであると考えます。

講師には、今回初めて盲ろう者と音楽を楽しむワークショップを実施していただきました。盲ろう者に出会い、ワークショップのプログラムを企画する機会としていただき、盲ろう者が参加できる活動の幅を広げることにつながったと推察します。また、アンケートで今後の活動のアイデアを尋ねたのに対して「岡田さんと相談しながら」という回答があったことに象徴されるように、盲ろう者という障害者像ではなく、個人として出会い、交流する場となったことで、豊かな相互理解が生まれたといえます。

通訳介助者からは、音楽を体で感じることや音楽で表現することに期待を寄せる声が多く上げられ、「生活訓練で取り入れたい」等の具体的な取り組みにつながる感想も出ました。盲ろう者の社会参加を実現するためには、通訳介助者との連携が必要不可欠です。今後は、通訳介助者との交流もさらに深め、音楽やその他様々な芸術文化活動を楽しむことへの認識を共有し、盲ろう者が主体的に参加できる活動の充実を図っていきたいと思います。



## インタビュー

## 東恵子さん

東恵子(あずま・けいこ)さんは、滋賀県立野洲養護学校に子供を通わせる近江八幡市の保護者らでつくる「八幡ハチドリ」の代表を務めておられます。また、近江八幡市の市民広報リポーター「赤こんりポーター」として、八幡ハチドリを是れとす市内の様々な福祉にまつわる活動やほっこりする話題を取材しています。八幡ハチドリを立ち上げられた経緯や活動への思いをお聴きしました。(令和3年5月14日 社会福祉法人グロー法人事務局にて)



## 声を届けるために

今、娘は、滋賀県立野洲養護学校高等部の3年生です。さかのぼりますが、2012年頃に滋賀県の養護学校の先生と保護者でつくる「滋賀スマイルの会」という会に入りました。子供たちがいきいき学べるように、と養護学校のことを考える会です。2013年には野洲養護学校のPTAの副会長に立候補しました。増築の動き等があった、その頃は学校のことを心配でした。野洲養護学校は、4市1町(野洲市、栗東市、守山市、近江八幡市(旧安土町除く)、竜王町)から障害のある児童生徒たちが通学しています。設置基準がないために特別教室や図書室を教室にするしかないなどの問題があり、4市1町の議員さんたちに設置基準についての理解を求めて要望を伝えたりしていました。

その後、卒業後のことが心配になってきました。卒業後に娘は生活介護事業所に通所することになるんですが、近江八幡市には選

択肢がまだ全然足りません。卒業した子供たちが地域で安心して暮らせることを願い、生活介護や就労継続、就労移行の通所事業所、暮らしの場の充実を求めて地域や行政に声を届けるためには、いろいろな保護者の会から声を上げた方が届くだろうなと思いました。やっぱり言い出しっぺの私が作るしかないと思って、2017年に、娘と同級生の保護者さん等に声をかけて、賛同してくださる人たちで「八幡ハチドリ」(野洲養護学校卒業後の日中活動と生活の場づくりを進める会)を作りました。今では、近江八幡市をつなぐ育成会を中心に、9団体で「近江八幡市障がい児者保護者連絡協議会」もできてるんですよ。

南アメリカの民話でハチドリが山火事を消す「ハチドリの一とすく」という話があって、小さくちばしで水をついばみ、しずくで懸命に火を消そうとしているのを見て、周りの動物たちは、「また、バカなことして。そんな大した力にならないのに」って笑

うんですけど、「私は私のできることをしているだけよ」とハチドリは言うんです。この話を文化祭で娘たちがハチドリ役になって発表したんですね。それで、会の名前は絶対にハチドリにしようと思いました。

毎年、入会募集をかけていて、だいたい40名ぐらいの保護者さんが入ってくださっています。働いている方も多いので、1年前から行事の日程を決めています。そうすれば休みを取ってもらいやすいかなと思って。一度会員になったら、結構会員継続という方が多いです。卒業生や作業所の保護者さんで会員になりたいという方もおられます。



定例会(この日のテーマは「障害のあるきょうだいを持つ人に聴いてみよう」) 2020年9月

## 八幡ハチドリ会の活動

年6回程定例会を開催し、勉強会や茶話会、DVD鑑賞会をしています。作業所の見学にも行きます。一人や個人では行きにくくても、保護者会としてだったら交渉しやすいです。コロナ禍でまだ見学には行きにくいですが、興味を持つ保護者さんが多いので年2回くらいは、企画したいですね。我が子がどんなところでどんな風に働くのかなって想像するのは楽しいですね。

昨年、近江八幡市の地域別懇談会で20年

後の町を考える「カタリング」がありました。それで今度、わが子との20年後の暮らしを語り合いたいと思い、八幡ハチドリでもカタリングをします。2040年のことを考えると暗くなるんですけど、楽しく未来を語ろうという会にしようと思っています。やっぱり大変なことも多いけど、つながり合っていきたい。結局、何がしたいのかなと考えたら、みんなが本人を真ん中にしてつながってほしいなって、親としては思うのです。

八幡ハチドリでは、要望書を提出したり市長さんと懇談させてもらったりもしています。今は、2040年の福祉の担い手不足のことがすごく心配です。それで、小・中学校の時代からもうちょっと障害のある人との交流を増やし、学校の教育の中に障害者のことを入れてもらうこと、中学校の実習先に福祉作業所を加えてもらうことを進めたいと思っています。今、高齢者の施設には実習生が来るんですけど、障害者の施設は対象になっていないようです。まずは、そういうところからコツコツと働きかけようとしています。でも、要望ばかりになってはいけないと思うので、私もできることをちょっとでもやろうとしています。それぞれができることを何かやって。まさしくハチドリ精神です。

私たちが会を発足する前、日本障害者協議会代表の藤井克徳さんが、滋賀県に来られたときにお話する機会があって、「とにかく場を持つこと、そしてときには楽しいことを計画して続けることが大事ですよ」っておっしゃってくださったんです。だから、今はコロナ禍の中で配慮しながらですけど、事務局と称してランチ会もしながら活動を続けています。



「ごほうびDay」と題してミモザのリース作りをしたときの様子 2020年2月

## アートはこころのつえ

私は、高校のとき美術部に入っていました。美術館に行くことがすごく好きで、昔からよく芸術鑑賞していました。ポーダレス・アートミュージアムNO-MAが近江八幡にできた最初の頃はまだ行ったことがなかったんですけど、八幡ハチドリの手がかりから、定例会に組み込んで毎年行っています。2月はNO-MAの「滋賀県施設・学校合同企画展ing… ～障害のある人の進行形～」鑑賞に決めています。やっぱり保護者さんに知ってもらいたいというのがすごくあって、もしかしたら自分の子供も内に秘めた才能を持っているかもしれないと思ったら、希望が持てるというか。娘は、重い知的障害を伴う自閉症なんですけど、みんながみんな自閉症だからアートが好きかという、そうでもないとは思いますが。でも、偶然描いた図や線がユニークだったりすると残しておきたくなりますね。NO-MAの展示会等を見ていると、障害のある人の絵が時代の先端みたいなのところがありますもんね。

以前、NO-MAの企画展で武友義樹さんというひもを振る人が紹介されていて親近

感を覚えました。娘も、私や主人が布粘着テープを貼り合わせて作ったひもを振るんです。「こころのつえ」だと思って思うので、自閉症の重い人には気持ちを落ち着かせる時に役立つから広げたいなと思っています。



ポーダレス・アートミュージアムNO-MAに訪れたときの娘希望(のぞみ)さん

## 糸賀思想との出会い

私のいところに脳性麻痺の人がいて、その人のお父さんである私のおじが奈良県ですと育成会の活動をしていました。その頃はまだ養護学校は義務化されていないときで、義務化を目指して運動をしていたようです。「この子らを世の光に」と書いた鉛筆を売る募金活動もしていました。その鉛筆は、まだ削らずに筆箱にあります。

当時は、おじがそのような活動をしていることは知っていましたが、子供だった私は、まったく興味がありませんでした。今は娘の障害のおかげで、糸賀さんの偉大さを知りました。糸賀さんの人生を描いた「NHKアーカイブス この子らを世の光に」という番組があって、それをみんなで鑑賞する定例会をしたことがあります。「愛はもともとあるから育つのです」とおっしゃった糸賀さんの最

後の講演も出てきます。有名な話ですけど、施しをこうような「この子らに」ではなくて「この子らを世の光に」と、自ら輝くように言葉を選んだという逸話もありました。

2016年に介護福祉士の資格を取ったのですが、国家試験の第一問が糸賀さんの問題だったので、私は絶対合格しないと！と思ったんです。本当に興奮しました！でも、私はたまたま障害児の親ということもあってわかったけど、介護分野の人の中には「誰？」っていう感じの人もいて、その偉大さはなかなか障害分野以外の人には伝わっていないですよ。



糸賀先生の言葉が書かれた鉛筆

## 赤こんリポーターとして楽しさも伝えたい

近江八幡市の市民広報リポーター「赤こんリポーター」の活動を始めて今年で4年目になります。ちょうど八幡ハチドリの手と同じくらいです。市内のことだったら幅広く市の広報や赤こんのFacebookに投稿できます。花も好きなので町で芝桜が見ごろだとか、自分で種をまいて育てた花の記事を投稿したり、定例会の活動について記事にしたりしています。

作業所の支援員さんと利用者さんが一緒に作業している姿を取材させてもらいたいと思って、市の秘書広報課に相談したら、「赤こんレポートの中だったら投稿してもらっていいですよ」って言ってくださいました。利用者さんのご両親の了解も得ないといけないので時間はかかっていますが、市内の作業所を取材するためのアポを取っているところなんです。

国は地域共生社会を推進していて、また、働く年齢を75歳まで伸ばそうとしているけど、実際、それで福祉の担い手不足の解消になるかわからないし……。でも、ちょっと夢を持ちたいと思っています。障害児の親として活動することは楽しいだけじゃないんですけど、でも楽しさも伝えたいと思うので、何か協力できないかなと思って、赤こんレポートで記事を投稿しています。発表の場があるというのはすごくありがたいことですし、負担なくやらせてもらっていて、知ってもらえるので、これも一石二鳥かなって思っています。

結局は娘のことが中心というか、もう娘の将来にちょっとでもつながればっていうような気持ちですべてやっている感じですね。親の心子知らずですけど(笑)。

東恵子(あずま・けいこ)  
八幡ハチドリの手 会長

フリーペーパーや小学生新聞の編集の仕事を経て、結婚を機に近江八幡市に転居。重い知的障害を伴う自閉症の娘と、地域の中学に通う息子の母。障害のある人が住み慣れた地域でいきいき暮らせるようにと、2017年、八幡ハチドリの手を立ち上げ、保護者同士の繋がりや学びの場を作っている。同年、ボランティア活動の市民広報リポーター(通称・赤こんリポーター)となり、地域のほっとする話題を取材している。

## インタビュー

## 太田清蔵さん

太田清蔵（おおたせいぞう）さんは、特定非営利活動法人NPO 結の家の代表を務めておられます。結の家は、デイサービス等の高齢者介護を中心とする事業所ですが、同敷地内にあるファームキッチン「野菜花」、就労継続支援B型事業所のあいとう和楽とともに、「あいとうふくしモール」という拠点であり、プロジェクトをしています。この町に暮らす人たちが、どのような状態になっても安心して暮らすことが出来る拠点づくりという壮大なこのプロジェクトに取り組むことになったきっかけや、今、向き合っている地域課題とその対応策を伺ってきました。（令和3年9月16日 あいとうふくしモールにて）

## 結の家ができるまで

もともと愛東町（※1）の出身です。ここは僕の土地なんですよ。

大学は地元を離れ、東北の大学に通いました。卒業後、東京都内にある知的障害者施設に就職し、縁あってあかね寮（現障害福祉支援施設あかね）に勤めることになり、滋賀に帰ってきました。その後、1990年には愛東町社会福祉協議会（現東近江市社会福祉協議会）で働くことになりました。その時期は福祉関連八法の改正が施行されて市町村にも老人福祉計画の作成が義務付けられた頃で、愛東社協もこの計画に参画していました。地域（集落）を基盤にした地域福祉計画、診療所の建設、高齢社会を見据えて、総合福祉センターの建設を進めた時期でした。その後、介護保険法が施行されると介護保険サービス事業に社協が取り組むことになりました。愛東町の地域（集落）を基盤にした地域

福祉計画に基づいて、社協は、地域福祉活動計画策定し、住民さんたちと自分たちの暮らしをどうつくるのかと話し合う場面をもち、検討を進めてきました。

その中のひとつの集落（現在の愛東外町）で安心できる集落をつくろうと住民さんたちと一緒にデイサービスセンターをつくったんです。自治会有志でお金を出し合い、民家改修をしてデイサービスを立ち上げました。デイサービスセンターで働く職員と住民さんたちで、自分たちの安心な暮らしをつくっていくことになりました。さらにデイサービスセンターではご飯をつくるんだから、そのご飯を必要な世帯にお弁当にして届けることができるだろうと、配食サービスもやることにしました。

愛東外町では、「もちつもたれつ活動」という住民相互の助け合い活動も実施していました。これらの取り組みをもうちょっと愛東町全体に広げていく必要があるだろうと、こ

こ小倉地区にも新たに拠点をつくったというわけです。今は、配食サービスもデイサービスのご飯も、知的障がい者の仕事づくりとして、あいとう和楽が担ってくださっています。愛東外町で取り組まれてきた「もちつもたれつ活動」はあいとうふくしモールの「ほんなら堂」として愛東地区を中心に活動が広がっています。

※1 愛東町～市町村合併により2005年に東近江市になる。

## ふくしモール構想、最初の石ころ

あいとうふくしモールは、いろいろな人たちと出会って今の形になりました。川副きよ子さん（あいとう和楽代表）の魅力であったり、野村正次さん（ファームキッチン「野菜花」を運営する株式会社あいとうふるさと工房代表）との出会いだったり。僕は感覚の人間なので夢を語り、野村さんはそれをちゃんと形にする人で、川副さんはほんわかやりながら、潤滑油の役割を担ってくれていて。男だけだったら絶対失敗していると思います、本当に。

さらに、ふくしモール構想（※2）について語り合う「モール」という集まりを月一開催してきたことが大きいです。ふくしモール構想を考えるようになったのは、中村恭子さん（保健師。滋賀県職員）からの話がきっかけです。

保健所にいた彼女が「介護の必要なおばあちゃんだったか、おじいさんであったか、がベッドから落ちただけけれども、年老いた家族の力だけでは戻せなくて、地べたにずっと

いたんだよ。こんな人たちはどうやって救えるのかな」という話をしてくれて、「そんなことを私に聞かれても……。じゃあ、みんな考えよう」と言って集まったのが「モール」の始まりで、彼女の話が最初の石ころなんです。それが2009年頃。月に一回、僕のお友達を集めて、そのお友達がまた違うお友達を集めてという形で集まった人たちの意見の集約によって、ふくしモール構想をつくってきました。

※2 ふくしモール構想～地域で安心して暮らすための仕組みの構想。それを形にしたのが、あいとうふくしモール。様々な機能を有する事業所がショッピングモールのように軒を並べるイメージからモールという言葉が使われている。



あいとうふくしモール入り口看板

ヘルス&ワークの  
デイサービス

昔は地域によらず屋さんがあって、そこで商品も買えれば、情報交換もできて、困りごとなんかも相談できましたよね。よろず屋さんは時代の流れの中でなくなり、今回、愛東町に唯一存在したスーパーが閉店しました。「買い物する場所がなくなった、なんとかならないものか」。ふくしモールに相談が持ち込まれました。歩いて行けるところにお店ができれば、よろず屋さんの代わりになるかも

しれない。川副さんや野村さん、住民有志で合同会社をつくって、地域の中の閉店したお店を、i・mart(アイマート)として今年の8月27日に再オープンすることができました。さらに移動販売も始めています。

それから、デイサービスセンター加楽(東近江市)を運営しているNPO法人の代表の楠神渉さんと一緒に、i・martの中に働けるデイサービスセンターとして、ヘルス&ワークのデイサービスセンターをつくろうと準備しています。例えばお店にモップをかけるとか、配達すべきものを詰めるとか、一緒に配達に行くとか。その働きに対して一回500円くらい支払えたら、帰りにはそれでお店の何かを買い物できるという楽しみにもなる。町の行き慣れた場所に自分の足で来て、健康を維持できるのがいいなと思うんです。午前中はデイサービスセンターにして、昼からは健康づくりだとかイベント的なことができるスペースとして使っていく。買い物に来ているお母さんたちのお子さんをお預かりするとか、そんなことができればいいだろうなとも思っています。



奥に見えているイートインスペースがヘルス&ワークのデイサービス実施予定場所

## 移動販売で地域のニーズをキャッチする

移動販売も始めていますが、物を販売するだけではなくて、ニーズキャッチでもあるはずと思っています。地域を回る中で「こんな人がいて、こんなことに困ってはるねん」ということがあればそれをキャッチして、i・martにいるほんなら屋(※3)の事務局スタッフに伝えて、そこからふくしモールの事務局が状況確認訪問し、ちゃんと必要なサポートにつなげていったり、そういう人たちをどういふふうに支援できるシステムをつくるのかを考えるイベントを組んだりとかができるければ、もっと広がるはずですよ。

※3 ほんなら屋～あいとうふくしモールの連携拠点(事務局)。地域の困りごとに対し、あいとうふくしモールの事業所のサービスに繋げたり、30分500円の料金で登録サポーターがちょっとした困りごとに対応する「ほんなら堂」を活用するなど、さまざまな知恵や仕組みを駆使して地域内での解決に取り組んでいる。



地域の子供たちの絵で彩られたi・martの移動販売車

## 事業展開と持続のための資金について

もともとは介護保険を軸に地域活動をやるうとしたわけです。介護保険が始まった

当初は、収益があったわけですよ。だから、これを財源に地域福祉活動していたわけです。ところが、介護保険が見直されていって、収益が上がらなくなり財源を失っていった。不誠実な事業所もあるから仕方がないかもしれないけれども、収益をちゃんと地域還元している事業所については、税金の優遇などしっかり評価してほしいと思います。

事業の持続可能性をどう組み上げるのかというのが課題で、今、僕たちが個人でお金を出して何とかしているけれども、これは良くないですね。薄く浅く、みんなでどう支えていくのかということになるのが大事ですよ。そうしたところを訴えながら進められると、本当のいい社会ができてくるのではないかなと思います。

## 巻き込みながら解決していく

あいとうふくしモールは、「あそこに行けば何とかなる」という拠点を狙っているけど、ふくしモール一つだけでは対応できない。今のような取り組みは一法人で完結してしまえば、実は楽なんだけど、それをやってしまうと膨らみもなければ、何にも繋がらないんですよ。いろいろな人たちがリスクを分散しながら、思いを寄せ集めてやっていかないと独り善がりになってしまうのでね。

たぶん滋賀の福祉の先駆者である糸賀一雄先生も池田太郎先生も田村一二先生も、いろいろな人を巻き込んで活動されてきたのだと思うんです。独り善がりですら駄目だし、連携はとても大事なことだけど、連携や巻き込みは目に見えないんですよ。糸

賀先生の近江学園もそうだと思うし、田村先生なんかは共同体を持ちながら見える化をしたと思うんだけど、やはり拠点がないと見える化にはならないです。

なので見える化をしたのがここの拠点です。先にお話ししましたが、「お店がつぶれたんだけど、何とかならないのか」ということまでここに持ち込まれるんですよ。そこから次の議論が発生するんですね。そうやっていろんなところに足を突っ込んでしまっただけで、自分で自分の首を絞めるという、こういう構図なんです(笑)。でも、そういうふう地域に困りごとを持ち込まれるということを狙ったはずなので、持ち込まれたものには対応していかなければということですね。

太田清蔵(おおた・せいぞう)

特定非営利活動法人NPO結の家 代表 介護支援専門員  
1984東北福祉大学卒業。同年社会福祉法人大泉旭学園旭出生産福祉園就職。1987社会福祉法人蒲生野会あかね寮就職。1991社会福祉法人愛東町社会福祉協議会就職。2004特定非営利活動法人NPO結の家代表。2013あいとうふくしモール代表。

## インタビュー

## 坂元考行さん

坂元考行(さかもと・たかゆき)さんは、一般社団法人よつば医療福祉総合研究所ワークショップ水口の所長です。利用者の方々がいるいろいろな経験を積み上げ、一般就労を視野に入れた基礎的なスキルを身につけられるようにサポートされています。坂元さんが就労支援に取り組むようになったきっかけや、ワークショップ水口で実践していることについてお話を伺ってきました。(令和3年11月17日 ワorkshop水口にて)



## 入所施設との出会い

出身は愛媛県です。もともと保育士になりたくて、保育の専門学校に2年間通いました。

実習で保育園、幼稚園、児童養護施設に行きましたが、もう1ヶ所、男性の保育士さんが働いているという地元の入所施設に2週間ほど実習に行きました。

そこで初めて障害者の方と触れ合い、刺激を受けたことを今でも覚えています。

そこは児童棟と成人棟が併設されている入所施設で、保育の現場とは違う『支援』の場でした。

実習が終わるくらいの頃、当時の係長さんが「君、今後の進路はどうするの？履歴書を送ってくれたら、何とかするけど」と声を掛けていただけたこともあり、その施設に就職し、5年間お世話になりました。

## 福祉の世界へ再び

親の出身が滋賀県でした。

私が25歳の頃、親が病気を患い、滋賀に生活の拠点を移すことになりました。

当時の私は「福祉の世界はもういいかな」と思っていました。

洋服に興味があったので、近くの洋服屋さんで就職し、福祉の世界から一旦退いていました。

滋賀県は福祉のパイオニア的な地域であること。糸賀先生のごことは愛媛にいた時から知っていたので、「滋賀に来て、福祉のことをやらないのもなあ」という思いが次第に芽生えてきました。

そんな思いが膨らみはじめた頃、びわ湖大津プリンスホテルで開催される福祉職場の合同就職説明会を案内され参加することにしました。70ヶ所ぐらいの施設や事業所が参加している中、再び福祉の世界につな

がる出会いがありました。障害福祉サービス事業所むつみ園の(現:株式会社ライフケアサポート代表)後藤清隆園長との出会いでした。

私と一緒に面接を受けた方は社会福祉士の資格を持っていたのですが、私は、保育士資格しか持っておらず「採用はない」と諦めかけていた時に後藤さんから電話をいただき採用していただきました。しかし、入所施設と通所の事業所は全く違っており、畑違いもいいところだったので、そこからは必死で仕事を覚え、実践の日々でした。

むつみ園で4~5年働いた後、第二むつみ園を立ち上げることになりました。

好奇心旺盛な私は自ら志願し、色々な事を経験させてもらったのちに第二むつみ園の施設長としてクリーニング事業を任されることとなりました。

当時、私物の衣類のクリーニングをしている事業所はなかったため、クリーニングの会社を見学させていただき、従業員の方がされていることを参考にしながら障害者の方に業務を提供できる方法を考えました。

そして、第二むつみ園も何年かしていくと、利用者さんも増え、お給料も1人月平均5万円ほどお渡しできるようになりました。福祉の世界で再び働けることに喜びを感じられるようになったのもこの頃だったように思います。

## ワークショップ水口とは

ワークショップ水口は、2019年4月に開設しました。

私は、第二むつみ園を退職し、2019年1

月からこちらに入職し、開設準備を行いました。

就労継続支援B型事業所ワークショップ水口は、協力事業先である株式会社ライフケアサポートが運営する3つの事業(珈琲事業・デザイン事業・農業事業)から業務委託を受け、派遣のような形で仕事に携わります。珈琲事業は、事業所と同じ建物内にある喫茶店「名坂珈琲」で提供するコーヒー(ドリップバッグの製造、欠点豆を取り除くハンドピック等)の製造に関わる作業。デザイン事業は、プロのデザイナーと共働しながら、カレンダー、名刺、チラシ等を制作。農業事業は、農業のプロの助言を受けながら、提携先や作物、出荷計画を決定し、野菜の生産を行っています。

ワークショップ水口では『誰のために働き、誰のために努力をするのか』を利用者の方々に理解いただくことを基本方針に掲げています。そして、利用者の方々には、ワークショップ水口で得られた経験を自信に変え、一般就労やA型事業所へステップアップしていただきたいと願っています。

具体的な支援については、福祉の世界で長年培ってきた経験や、またプロの方々からの助言を活かしながら新しい支援の形を模索し、職員全員で実践しています。

支援する職員と技術を教えるプロが常に情報共有をすることはもちろん、利用者の方々を社会に送り出していくための勉強会を開催し、何をしないといけないかという個々の気づきの場も設けています。

また、利用者の方々との信頼関係の構築においては、コミュニケーションに重点を置いています。自己発信、自己選択を行う機会をコミュニケーションの中に取り入れ、利用者

さんの協調性や思考能力の向上につながっています。

ワークショップ水口を一言で表現するのであれば『仕事を通じて自立支援を行っている就労継続支援B型事業所』だと思っています。



珈琲事業の作業室。モチベーションを上げるために、棚には完成した商品や感謝のメッセージが並べられている。

## 本人に決定権がある

当事業所の利用を考えている方には「ここに来てください」と言うことはありません。利用するのは本人ですから、本人に決定権があることだけを伝え、検討いただいています。

だからかもしれませんが、ここを利用される皆さんは、自分で決めてここに来ているので、モチベーションが違うように感じます。私がお本人に聞くことは「将来、何になりたいですか?」と「お給料はいくら欲しいですか?」ということです。

当事業所は、高いお給料を支払うことを一番の目的としているわけではないので、より高いお給料が欲しい場合は、他の事業所に行くことをお勧めしています。

将来の目標(職業)がある方には「社会で働くうえで大切なことを一緒に学んでいきましょう」とお伝えしています。

また、保護者の方には「B型事業所ですが、何年後かには巣立ってもらいますよ」「ここはあくまでも通過点の事業所ですから」とお伝えします。



デザイン事業の事務所で研修をしている様子

## 「来たいと思ったから」

中学校の時からずっと引きこもりだった方が、ここに実習に来ました。学校の先生からは「学校に来てない生徒なんです」と事前に聞いていました。コミュニケーションの手段は筆談で、実習に行けるかどうかもわからないということだったのですが、来てくれました。

「来れたじゃん。すげえじゃん」って言ったから、彼は普通にしゃべってくれました。「筆談って聞いていたのに、しゃべってるやん」と思いました。

今では、利用者として週4~5回、みんなの前で挨拶もされています。学校に行かなかった彼に、なぜ今は毎日来ているのか直接聞いてみると「自分が来たいと思ったから」と言っていました。本当の理由かどうかはわかりませんが、1人の大人として、社会人として彼と接してきたことが良い結果に結びついたように感じています。



「名坂珈琲」に並ぶコーヒー豆

## 失敗してもいいと必ず伝える

名坂珈琲のマスターは、ずっと福祉の分野で働いていたわけでも喫茶のマスターをしていたわけでもなく医療従事者です。デザイン事業で指導している者も福祉に携わったことはありません。しかしながら、福祉分野の人にはわからないことや、視点を教えていただいています。ライフケアサポートの後藤代表には、企業的な視点や、園長もされていたので福祉的な視点から助言をいただいています。私にはない視点を持つ方々の意見やアドバイスを参考にしてきたことで、今の自分があるのだと思っています。

企業で働いてこられた方や自営業されている方など、福祉の世界では持っていない視点をここで活かしていけないか、そんなことを考えながら常にアンテナを張っています。

そして「まずやってみる」というきっかけを作り、「やって駄目なら、やめたらいい」それくらいの想いで取り組む姿勢が、自分の力になっているようにも思います。

私は、利用者さんにも職員にも「失敗してもいい」と言います。

失敗には何か原因があるわけだし、次に生

かせるような失敗であればいくらでもしていいと考えています。

仮に私が失敗しても誰かがサポートしてくれると信じていますし、サポートしてくれた人に感謝することで良好な関係性を保ち、何かあれば私がサポートするという気持ちを常に持っています。

利用者さんにも職員にも「失敗すること」を通じて、人との関わり方を学んでもらいたいと考えています。

坂元孝行(さかもと・たかゆき)

一般社団法人よつば医療福祉総合研究所ワークショップ水口 所長

地元の入所施設に支援員として入職。平成16年障害福祉サービス事業所むつみ園に入職し、平成20年より第二むつみ園所属。平成31年からは一般社団法人よつば医療福祉総合研究所ワークショップ水口開設。B型事業所からメンバーさんの目標に向かってステップアップ出来る事業所を目指し実践している。

# まとめ

## —浮かぶ顔、想像し注ぐ力—

自分が暮らしている町にふらっと出かけたり、何かしらのイベントや活動に参加しようとしたりして、実際にその行動を起こすことができるようになるまで、どんな要因が揃う必要があるだろうか。ふらっと出かける先や参加できるイベントが「ある」という情報を持っていないと、そもそも行動を起こそうとも思わない。情報は得たけれどその場やイベントが何なのかイマイチよくわからない。飛び込みで行ってみようか、いや、場違いで気まずい思いはしたくないし、参加すること自体ノーと言われたらやるせない。そのことがクリアされたとして、ではその場までどうやって行こう。自分は車を持っていないから、公共交通機関だけで行けないと難しい。行ってから完全アウェーで居住まいが悪かったらどうしよう、誰か受け止めてくれるだろうか……。などなど、外出や活動参加を決めるまで、多くの人がこうしたことを考え、調整している。

本事業は、主に盲ろう者、知的障害者、高次脳機能障害者のこのことについて、美術鑑賞会や食のワークショップなどの文化芸術活動(食文化が文化芸術に含まれることは文化芸術基本法にも定まっている)を通して考えている。考えたことはまた次につなげるということを繰り返し、一人でも多くの人、社会参加のしやすさを伸ばしようとしている。

本事業を実施する法人が運営する美術館という、内部の資源を活用し、その要因を探った一昨年度。その重要な要因の一つとして‘町にともに暮らす人’に焦点を当て、県内のさまざまな資源と人材を巻き込んだ取り組みをした昨年度。そして今年度は、鑑賞のしやすさを考え、つくることそのものに障害当事者に参加してもらった。毎回新たな課題が見つかるとともに、新たな出会いと顔見知り同士が増えていく。最初は‘盲ろうの人’という障害属性でその人を捉えていたのに、自然と‘〇〇さん’という一個人としてその人を捉えるようになっていく場面をいくつも見てきたし、自分たちも経験してきた。

‘障害のある人のため’といったとき、個々の誰かの顔が浮かんでいるか。私たちには浮かぶ顔がある。そのことで次の方法を考えることができるし、その人に意見を聞いたりと、実際に巻き込んだりすることもできる。次年度も、〇〇さんだったらどうだろうと想像し続け、当事者(障害だけでなく、支援当事者等周りも含む)の話を聞き、実践し続ける。けれど、わかった気にはならない。このことを肝に銘じて、滋賀県に暮らす人同士が安心して出会い、活動できる地域になるように惜しみなく力を注ぎたい。